

教養／副教材としての『批評理論入門』

― テキスト間の架橋のために ―

I 序論

私は、一九九一年度から二〇一一年度にかけて、高等学校の国語科（現代文）の分野において、いわゆる教科書を用いた授業の他に、教科書以外の副教材の使用を前提とする、若干の実験的要素を含む授業を断続的に試みてきた。私としては、二〇一二年度以降においても、これを継続したいと考えているところである。

本稿は、これらの副教材のうち、なんらかの意味において〈国語の「教養」〉という問題設定に関連すると考えられるものの一部を選択的に紹介し、それらの特質について包括的に回顧するものである。また、本稿においては、（ありうべき副教材）とは何かという問題についても併せて考えることとしたい。はたして、私の試みは、〈国語の「教養」〉という巨大な問いに対する、何らかの応答ないし提言へと連なるものとなるのであろうか。

ところで、本稿の第Ⅱ節以降においては、具体的な副教材を

永 井 健 一

例示しつつ述べていくことになるが、今回、中心的に示したい副教材は、主に第Ⅲ節でとりあげる、廣野由美子『批評理論入門』¹⁾である。新書版の小著ではあるが、私のこれまでの副教材探索の過程においては、ひとつの転機となったものであった。その意味で、私の副教材探索の過程は、『批評理論入門』を問にはさんで、それより前、それより後、という三者として区分することができるのである。〈前〉については第Ⅱ節で、また、〈後〉については本稿の最終節である第Ⅳ節で、それぞれとりあげることにしたい。

Ⅱ 『批評理論入門』以前―副教材の探索

一 この期における副教材探索の主要な観点

この第Ⅱ節で言う『批評理論入門』以前とは、私がまた『批評理論入門』を副教材として使用していない時期のことである。この期における私の副教材探索の主要な観点は、現時点からの回顧としては以下の二点に集約できる。

第一の観点は、使用中の教科書に収録されていない作品群を、

詩集・小説集などといった、いわゆるアンソロジーの形態において生徒に提示する場合に最良であると思われる書籍を探索するというのである。また、第二の観点は、いわゆる哲学／思想入門書などのうち、高等学校の生徒を対象として使用する場合に最良であると思われる書籍を探索することであつた。

二 第一の観点——量的／質的拡張

第一の観点からの副教材探索の動機は、「量的／質的拡張」にある。周知のように、高等学校の多くの生徒にとって、「詩」「短歌」「俳句」「随筆」「小説」「批評」「戯曲」「評論」等々との出会いは、予備校・塾なども含めた広義の学校的な場の、しかも、検定教科書・問題集などといった一段と特殊な場を通してなされるといった状況に陥りがちである。検定教科書・問題集にはそれ相応の目的があるのであつて一概に否定すべきものであるとまで言うつもりは私としてはないのであるが、それにしても、検定教科書や問題集に掲載されるべく最初から意図的に書かれた文章は、教科書編纂者などによるものを除けば、極めて少ないはずである。一方、検定教科書は、現行の制度的制約その他の諸条件により、結果的に掲載可能な文章の量と質とに対して極度に制約を加える結果をもたらしている。検定教科書には、量的な側面から言えば、長大な文章を掲載することなど事実上できないのであり、質的な側面から言えば、「宗教」「政治」「革命」「性」「死」「犯罪」等々、極めて基本的かつ重大な問題領域で

ありながら、掲載の禁忌となる領域が無数に存在している。問題集にしても、「小説」「評論」「随筆」などのごく一部を切り取ったものになりがちである上、作問上の都合からのやむを得ない字句の変更や空欄設定の多用など、「小説」「評論」というよりは、「小説」や「評論」の破片あるいは残骸に近い状態と成り果ててしまふほかないのである。一部の著作者が自分の文章を素材とした入試問題を問題集などに転載することを認めないというのもある意味では当然であらう。

つまり、検定教科書や問題集の外部にこそ、本来の「詩」「短歌」「俳句」「随筆」「小説」「批評」「戯曲」「評論」等々といった文章の世界が形成されているのであつて、その逆ではないという明白な事実を、すべての生徒に、実効性のある形において、あらためて伝達し続けなければならないのである。検定教科書や問題集は、その外部の文章の世界の存在を前提として本来の機能を發揮すべきものであつて、検定教科書や問題集だけを凝視し、その精読につとめたところで得られるものはきわめて限定的なものにとどまるほかはない。換言すれば、検定教科書や問題集の外部の文章の世界に親しむことなしに、検定教科書掲載の文章を理解したり、問題集の間に自信をもつて答えたりすることも、究極的には、できないということである。

以上のような観点から採用した副教材について具体的に述べたい。ここでは高等学校のある学年の生徒全員に配布した副教材、あるいは、ある学年の文系または理系の生徒全員に配布した副教材の事例の一部として、曾根博義・日高昭二・鈴木貞美

による編著『大学で読む 現代の文学』²⁾と大越愛子『フェミニズム入門』³⁾を紹介する。

『大学で読む 現代の文学』は、その「はしがき」によれば、「ひとつのテキストにおいても、それが無数の異なる仕方で解釈されうという、新たな読書論の要請」、「読者の関わりによって流動し生成するテキストへ、という現代の要求」、「現代日本文学の混沌とした世界に触れるだけでなく、それらを批評的に読むための助走路となること」に配慮したものである。短編小説が中心であるため、「量的／質的拡張」的期待のすべてに対応するものではないが、「政治」「革命」「性」など、検定教科書からは必ずしも得られない問題領域を含んでいる点を、副教材採用者側として高く評価したわけである。「大学で読む」という題名ではあるが、そのためにこそ、むしろ高等学校の生徒にも提供し得るということになるのか。掲載されている「作品」は、横光利一「頭ならびに腹」、川端康成「雨傘」、宮沢賢治「注文の多い料理店」、中野重治「夜明け前のさよなら」、江戸川乱歩「押絵と旅する男」、梶井基次郎「闇の絵巻」、堀辰雄「不器用な天使」、伊藤整「生物祭」、小林秀雄「故郷を失った文学」、太宰治「猿面冠者」、石川淳「山桜」、内田百閒「虎」、井伏鱒二「へんろう宿」、島木健作「赤蛙」、坂口安吾「桜の森の満開の下」、大岡昇平「歩哨の目について」、安部公房「赤い藪」、武田泰淳「橋を築く」、円地文子「二世の縁 拾遺」、大江健三郎「不意の唾」、三島由紀夫「雨の中の噴水」、吉行淳之介「鞆の中身」、大庭みな子「青い狐」、古井由吉「人形」、以上の計二十四編である。

検定教科書に掲載されているものも含まれてはいるが、武田泰淳「橋を築く」など、教室内での音読を一瞬躊躇させるような内容にわたるものも少なくない。「質的拡張」には十分であろう。

まずは、全作品を各自で自由に読んでもらった場合の感想であるが、意外なことに、特定の作品に関心が集中しすぎるということとはなかったのである。「青春」「恋愛」「生」「性」などになんらかの点で触れている作品に対して極度に関心が集中するのではないかとの予測は、よい意味で裏切られたのであった。

次に、検定教科書を用いた授業と同様の方式で、この『大学で読む 現代の文学』中のひとつの作品を用いて授業を実施した場合についてであるが、試行錯誤の過程において、「謎めいた短編小説」としての取り扱いが重要であるということを確認させられた。つまり、「読解が不可能ではない」が、その「読解が必ずしも容易ではない」という、非決定的な状況の演出ということになろうか。比喩的に言えば、真犯人の名がつかいに明かされぬままに終わる推理小説をめぐる終わりなき論議のようなものかもしれない。この点で、内田百閒の「虎」などを、副教材として再発見できたことは私にとっては大きな収穫であった。

ところで、『大学で読む 現代の文学』には、本文のほかに、注・解説・参考文献目録が付されており、しかもそれらは、「はしがき」にもあるように、「第一線で活躍中の気鋭の近代文学研究者の手になるもの」である。副教材採用者側としては、「注」が必要最低限である点が時に少々辛いところであるが、「注」

の少なさも含めて「解説」がうるさすぎない点が副教材としてありがたい。ただ、残念ながら生徒が自主的に「主要参考文献目録」の中から関心のあるもの入手して読む段階まで進んだ例は少なかった。副教材採用者側としてはそのあたりに配慮すべきであったと言える。

大越愛子『フェミニズム入門』の「カバー」には、「男性の、男性による、男性のための思想体系がいかに虚構と欺瞞にみちているか」、「近代主義から近代批判、イリガライやクリステヴァなどのポスト・モダンに至るまでのフェミニズム思想の破壊力の変遷をたどりつつ、さらにリプロダクション、性暴力、国家と性など最も現代的なテーマに果敢に挑戦する。」などと記されている。

私の勤務校は男子校であり、これらの「最も現代的なテーマ」を認識することなく卒業に至る危険性を常に持つている。「政治経済」または「技術家庭」などに関連する教科・科目においてこれらのテーマに触れ得る機会も皆無とまでは言えないのであるが、誤った認識の更新にまで十分に到達しているかどうかについては疑問の余地を残すところである。

本書は四章から構成されているが、序章としての「第一章 フェミニズムの快楽」に続いて、「第二章 フェミニズムの潮流」、「第三章 フェミニズムの展開」、「第四章 フェミニズムの理論的挑戦」が置かれている。いずれの章の内容も、これらの知の域外にあった男子校の高校生にとっては、若干の衝撃と新鮮さに満ちたものであつたはずである。特に第四章の「1

フェミニズムの基本理念」において概説されている「家父長制」「ジェンダー」「セクシュアリティ」「リプロダクション」「ファロセントリズム」といった概念は、彼らの世界観の少なくとも一部に修正を迫ったことであろう。

いずれにしても、虐げられ貶められてきた弱者であるがゆえに、かえって世界の実相を認識しうる特権を付与されることがあるという一点を生徒に提示できたとすれば、意味のある副教材であつたと考えたい。しかし、フェミニズムの概念にせよ、ジェンダーの概念にせよ、日々の知的闘争の過程において、その後も変化し続けていると考えるべきであり、本書の一読をもつて男子校に学んだことの負の側面が一掃されるなどと生徒が誤解することのないよう留意しなくてはならない。知的営為の動的な側面を忘れることなく、少なくとも未来への時間軸に沿って開放された知の在り方というものについても生徒に提示すべきであると言える。

三 第二の観点——言語による言語の操作

第二の観点からの副教材探索の動機は、「言語による言語の操作」にある。なぜならば、副教材としてのアンソロジーを生徒に提示する段階にまでこぎつけたとしても、「ひとつのテキストにおいても、それが無数の異なる仕方で解釈されうる」と、「それらを批評的に読む」こと等々について、実効性のある形態において対象化を図るためには、対象としての言語テクストを、その外部の言語によって（論ずる≡語り直す）能力

ないし技術の獲得が要請されることになるからである。このことは言語をその抽象性において自在に操作する能力ないし技術を獲得するということと事実上不可分の関係にあると言える。

このような場合に求められる副教材は、まずは哲学／思想入門系の書籍であると考えられがちである。私も当初はそうように考え、高校生に提示するのに最良と思われる書籍の探索にとめたものである。周知のように、生徒が高等学校卒業後の進路として、大学の学部などに進学しようとする場合の入学試験において、特に国語（現代文）の試験問題の中に、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、デカルト、スピノザなどに関する、いわゆる哲学入門的な知識を前提としているものが出題されることがある。これは頻度としては必ずしも高くはないものの、中長期的に見た場合には定番と言ってもよいほどの安定的傾向である。さらには、ある年代においては、出題上の流行現象であろうか、ニーチェよりも後の世代のさまざまな哲学者または思想家に関する知識を事実上要求するものも多々あった。

しかるに、国語（現代文）系の検定教科書には、それらに関する適切な教材は掲載されてはいなかったのであった。そのような状況において得られた副教材の事例の一部として、竹田青嗣『現代思想の冒険』¹、貫成人『哲学マップ』²、知的時間を愉しむ会『常識としての世界の哲学』³を、以下、ごく簡単に紹介したい。

竹田青嗣『現代思想の冒険』は、「序 思想について」の後、「第1章」から「第6章」が続き、「終章」その他を配する構成

となっている。哲学入門書に対する一般的な期待を裏切らない「序」も良いが、副教材としては、「第1章〈思想の現在〉をどうとらえるか」の中の「2 マルクス主義の崩壊と現代社会」、「3 高度消費社会とポスト・モダン状況」といった項目が、少なくともある年代における試験対策としての一側面から見ただけでも実に有用であった。すべてを列挙する余裕がないが、例えば、「第2章 現代思想の冒険」の中の「1 ふたつの源流——ソシユール言語学から構造主義、記号論へ」、「4 現代思想のもうひとつの源流——ニーチェと反形而上学」等々の項目も同様である。しかし、本書の頂点はおそらく「第5章 現象学と〈真理〉の概念」などを経た、「終章 エロスとしての〈世界〉」に置かれている。このあたりの筆勢には熱気のようなものまで感じられるのであるが、そうであるからこそ、残念なことに、現代文の副教材としての使用が少々困難になってしまいうのも事実である。哲学あるいは思想それ自体に高い関心を持つ読者にとつては良書であっても、本書から得たすべての知見を、別途、副教材などとして提示された「詩」や「小説」の読解に応用できる生徒はむしろ例外的存在であろう。私にとつて本書は、いわゆる哲学／思想系のテキストと文学系のテキストの間に横たわる溝を埋める何かが必要であることを認識させられた副教材である。

貫成人『哲学マップ』の「カバー」には、「哲学を『思考の道具』として徹底活用するための実用ガイドブック」とある。著者による「はしがき」にも、「さまざまな哲学の関係を一望する

には「哲学の地図」が必要だ」とあり、そのことが本書の題名の由来ともなっているようである。「はしがき」の他、十三の章と終章とからなる構成である。目次を見ると、どの章にも哲学者／思想家の人名の見られない、整然とした構成を持っている。例えば、「第一章 哲学の出発点」、「第三章 中世における神と人間」、「第五章 哲学の「頂点」——近代」、「第八章 現代哲学（1）——言語分析」といった具合にである。「第十二章 東洋思想」については別途一冊の書籍を求めたい気もしないではないが、生徒に哲学／思想の知見を「一望」してもらいうる目的に限定して考えるならば、竹田青嗣『現代思想の冒険』よりも適していたのではないだろうか。

知的時間を愉しむ会『常識としての世界の哲学』の副題は「ソクラテスからサルトル、フーコーまで」となっている。「まえがき」にも「古今の哲学のエッセンス」、「古今の哲学をコンパクトにまとめた」とあるように、これ以上の要約は事実上不可能なのではないかと思われるほどの潔い記述が特徴的である。なお、全体的に簡略ながら、「第7章」は「東洋哲学」にあてられている。哲学／思想の入門書の補助的な書としては好適であるが、現代文の副教材として見た場合、単独での使用は苦しいところである。

四 この期における副教材探索の問題点

包括的に言えば、竹田青嗣『現代思想の冒険』、眞成人『哲学マップ』、知的時間を愉しむ会『常識としての世界の哲学』

いずれも、当然のことながら、現代文の副教材として書かれたものではまったくない。このことは、現代文の副教材としての使用には若干の無理があるということでもある。いわゆる哲学／思想系のテキストと文学系のテキストの間に横たわる溝を埋める何かが必要であることがあらためて痛感されるところである。対象としての言語テキストを、その外部の言語によって（論ずる＝語り直す）能力のない技術の獲得に直接的に寄与する副教材が発見されなければならないのである。

Ⅲ 『批評理論入門』——副教材としての

廣野由美子『批評理論入門』の「カバー」と「まえがき」とから、順にそれぞれ一部分を紹介する。

批評理論についての書物は数多くあるが、読み方の実例をとおして、小説とは何かという問題に迫ったものは少ない。本書ではまず、「小説技法篇」で、小説はいかなるテクニクを使って書かれるのかを明示する。続いて「批評理論篇」では、有力な作品分析の方法論を平易に解説した。（中略）多様な問題を含んだ小説『フランケンシュタイン』に議論を絞った。

具体的な作品を抜きにして理論について語ることは、空しい。小説が言語によつて書かれたものである以上、テクストを中心に置くことなしに批評が先行することはありえな

いはずだからだ。(中略) 小説を研究するためには、まずそのテクストの成り立ちを調べることに、つまり技法の側面から分析することが不可欠なのである。／しかし、テクストを取り囲んでいる世界を遮断し、ひたすら作品の内側だけを眺めているのは、狭い読み方だ。ましてや、たんに印象や直観のみに頼って作品を解釈するのは、貧しい読み方だと言わねばならない。私たちは、批評理論という方法論を持つことによって、自分の狭い先入観を突破し、作品の解釈の可能性を拡大することができる。

本書を現代文の副教材として使用する場合の利点は、翻訳小説としての制約は免れないものの、近現代の「小説」である、メアリ・シェリー『フランケンシュタイン』の日本語版を方法論の適用対象として継続的に活用できる点にある。実際には、本書は小説『フランケンシュタイン』からの翻訳済みの引用を多量に含んでいるため、メアリ・シェリー『フランケンシュタイン』の日本語版を参照することなく、ある程度まで読み込むこともできるのだが、いずれにせよ、本書においては、〈小説と〈論〉〉という異なるテクストの架橋という行為が、あらかじめ設定されているのである。副教材としてのアンソロジーと方法論としての転用を期待される哲学／思想入門書とを別個に準備した上でその有機的な結合を図るという、時間と労力とを要する困難な作業が基本的には不要となってしまうのである。これまでの副教材探索は、いったい何だったのであろうか。

二部構成をとる本書の「Ⅰ 小説技法篇」には、左記の計十五の項目が含まれる。

冒頭／ストーリーとプロット／語り手／焦点化／提示と叙述／時間／性格描写／アイロニー／声／イメジャリー／反復／異化／間テクスト性／メタフィクション／結末

それぞれの項目は本文中においてはさらに細分化されており、入門者用としては十分な質と量とを有していると言つてよい。例えば、「語り手」の項目は、「一人称の語り」と三人称の語り」、「梓物語」、「信頼できない語り手」に細分化されており、「焦点化」の項目は、「外的焦点化と内的焦点化」、「不定内的焦点化」、「多元内的焦点化」に細分化されている。

本書を副教材として使用した後の、検定教科書を用いた授業でもこれらの技法についての知識は生徒にとつても大いに有効活用できたことは言うまでもない。

一方、本書の「Ⅱ 批評理論篇」には、左記の計十三の項目が含まれている。

伝統的批評／ジャンル批評／読者反応批評／脱構築批評／精神分析批評／フェミニズム批評／ジェンダー批評／マルクス主義批評／文化批評／ポストコロニアル批評／新歴史主義／文体論的批評／透明な批評

これらのうち、「文体論的批評」については、メアリ・シェリー『フランケンシュタイン』の原語である英語が前提となるため、残念ながら日本語現代文の副教材としての活用之余地は応用の可能性程度にとどまる。また、その他の批評理論についても、『フランケンシュタイン』のような万能とも言える切り口を備えたテキストを例外的なものとみなすならば、それぞれの批評理論の適用対象となりうるテキストは限定的なものとならざるをえないというのが、当然と言えば当然ながら、副教材としての使用後の実感である。一言で言えば、これらの「批評理論」を任意の文学系のテキストに「自由に」適用するよう生徒に指示することは、哲学／思想系の知見を方法論として文学系のテキストに「自由に」適用するよう生徒に指示することと同様、残念ながら、無理があるのではないか。そして、その文学系のテキストを、近現代日本のものに限定した場合には、さらにその困難性が露呈してくるのではないだろうか。

「あとがき」によれば、「本書の原題は、『新・小説神髓』というものだった」とあり、さらに、「読者を迷わせるタイトルであるとの編集者の懸念から、『批評理論入門』と改題された」とも記されている。本書の表紙に、副題として『フランケンシュタイン』解剖講義」なる文言が入られたのもそのような経緯によるのであろう。

ないもののねだりの苦言をあえて呈するならば、本書の「小説」概念は、『小説神髓』に言う「小説」の概念と比較した場合、どのような差異を持つことになるのか気になるところである。

さらには、近世日本の「小説」概念、近現代日本の「小説」概念、広義の「中国」における「小説」概念との差異についても同様の「懸念」を感じないわけではない。本書の「小説技法篇」が日本語現代文の副教材としても有用であるように感じられることと、「批評理論篇」に若干の使いにくさを感じてしまうこととの遠因は、そのあたりにもあるのかもしれない。私は、現在、本書を副教材としては使用していない。

かくして副教材探索の過程はとどまることを知らぬものとしての相貌を帯び始める。いわゆる哲学／思想系のテキストと文学系のテキストの間に横たわる溝を埋める何かが必要であるのと同様に、これらの「批評理論」と文学系のテキストとを架橋する何か、さらに必要とされることになるのだ。

IV 結論にかえて——ありうべき副教材に関する提言

ありうべき副教材とは、結局のところ何なのか。暫定的な結論から言えば、それはもはや探索される対象ではなく、新たに書かれなければならないはずの一冊の書である。端的に言えば、異なるテキスト間の架橋に関する経験知を持つ者、それはほかならぬ〈研究者〓教育者 個々人〉である。今日でも〈研究〉と〈教育〉とが本当に「車の両輪」とされているのであるならば、今こそ〈研究者〓教育者 個々人の架橋的经验知の（対象化〓外部化〓言語化）が求められても良いはずである。そのことはやがては架橋的经验知の共有と共用とをもたらすのではないだろうか。私は、〈教養〉がいつの日にか、そのような側面を持

つことに期待したい。

注

- 1 廣野由美子『批評理論入門』（中央公論新社 二〇〇五・三）
曾根博義・日高昭二・鈴木貞美 編著『大学で読む 現代の文学』（双
文社出版 一九九一・六）。「はしがき」にある「第一線で活躍中の気鋭
の近代文学研究者」とは、石原千秋、曾根博義、高橋世織、佐藤健一、
鈴木貞美、日高昭二、藤本寿彦、紅野謙介、和田博文、佐藤秀明の各
氏である。なお、本書の他にも、ほぼ文庫版サイズの『ちくま日本文
学全集』全巻のうちの何冊かを配布することや、中公文庫版の『日本
の詩歌』全巻のうちの何冊かを配布することも検討したが、諸事情に
より実現には至らなかった。
- 3 大越愛子『フェミニズム入門』（筑摩書房 一九九六・三）。ちなみに、
本書と同時に、金井景子・川口晴美・紅野謙介・朴裕河 編『女子高
生のための文章図鑑』（筑摩書房 一九九二・八）および金井景子・川
口晴美・紅野謙介・材木谷敦 編『男子高生のための文章図鑑』（筑摩
書房 一九九三・二）を生徒に配布することも検討したが、残念ながら
両書ともに既に入手困難となっていた。
- 4 竹田青嗣『現代思想の冒険』（筑摩書房 一九九二・六）
5 貫成人『哲学マップ』（筑摩書房 二〇〇四・七）
6 知的時間を愉しむ会『常識としての世界の哲学』（PHP 研究所
二〇〇八・二〇）
7 メアリー・シェリー 著 森下弓子 訳『フランケンシュタイン』（東京
創元社 一九八四・二）

（早稲田高等学校）